

イスラエルとパレスチナを流れる時間（引き継ぐ記憶と消す記憶）

小池誠一（IGNITE 機構）

コロナによる活動自粛が段階的に解除され、6月19日に県をまたぐ移動の制限が解除されました。特別な理由なくして藩を超えられない移動の自由がなかった江戸時代に戻ったかのようでした。本学は日本全国、世界各国から学生さんが集まっています。IT技術の発達で多様なコミュニケーションが可能な時代とはいえ、直接会えない家族への想いを募らせた方も多かったと思います。移動の自由がないうえに、情報さえも制限されていたら・・・、どれほどもどかしいか、今なら想像できるかもしれません。世界にはそのような状況下で暮らしている人々もいるのです。

その一つの例がパレスチナです。パレスチナ問題という言葉を知っている人は多いと思います。歴史の話は割愛するとして、一度地図でパレスチナの位置を見て下さい。イスラエルの建国と占領の結果、イスラエルを挟んで「ガザ」と「西岸」という2つの地区に分断されています。ガザは海を除く3方を強靱な壁で囲まれ、イスラエル軍によって完全封鎖されています。西岸もイスラエルとの間は高い壁で囲まれ、検問所を通じて極めて限定的な物流等が認められているにすぎません。イスラエル、ガザ、西岸の人たちは原則相互に交流できず、平時においては監視を前提に電話やメールは可能ですが、ほとんどの人は統制されたメディアを通じてのみ他の地域の様子を知るようになります。

私は2008年から2010年にかけて日本の援助機関のパレスチナの責任者として現地に駐在していました。私の働いていたパレスチナの現地事務所は西岸とガザにそれぞれありましたが、安全上、外交上の理由でイスラエルのテルアビブに住み、そこにも事務所を構えていました。このようにイスラエル、西岸、ガザの3つの事務所を統括していたため、イスラエル軍の許可を条件にイスラエル、西岸、ガザの間を往来していました。当時、外交官や国際機関の人でさえ、完全封鎖されたガザを含めた3つの地域を頻りに移動している人はほとんどいませんでした。タイムトラベラーに対して私は空間トラベラーでしょうか。最もトラベルは空間移動が前提なので閉ざされた3つの異なる世界を渡る異界トラベラーというのが近いかも知れません。自由がない程、制約が大きい程、人の想いは強くなります。想いが強くなると現実からずれが生じやすくなります。また、交流がないので一方的な想いです。3つの地域の人々の強くそして一方的な想いが、異界トラベラーの私の中で頻りに交錯します。3つの地域の人達同様に互いに知らなければよかったと思うこと、胸が苦しくなることに度々遭遇します。

パレスチナの西岸地区にある難民キャンプを初めて訪れた時のことは未だに鮮明に覚えています。難民キャンプというと何も無い所に多数のテントが不規則に並ぶ様子をイメージしませんか。ところが、目の前には一つ一つは簡素とはいえ、レンガ造りの家が集まっている集落の光景がありました。1948年のイスラエル建国によりパレスチナ人が故郷を失ってから当時で60年の歳月が流れ、難民も3世から4世が誕生するまでになっていました。最初はテント暮らしから始まった貧しい営みも、人間の生活力があれば、そして時間が経てばレンガを積み上げる手仕事でも家が立ち、やがてりっぱな村に発展することに感心しました。今テレビで「ポツンと一軒家」という番組があり、山奥の一軒家の住人の暮らしが報道されています。多くの場合は元々集落の中で暮らしていた家の一つであったものが、その家族以外の人が集落から出て行き、結果として一軒家となったケースがほとんどです。村を離れた人の家や畑も人の手がなくなり、長い時間の自然の復元力で緑に還り始めたことでポツンと一軒家であったように見えます。この番組を見ると真逆の観点で難民キャンプでの光景を思い出します。たとえ微々たるものであっても継続する人間の営みと自然の復元力の力強さとその相克、そして時間の蓄積がもたらす影響力の大きさを思い知らされます。

ある日、難民キャンプの長老の家を訪ね、故郷を追われた当時の話や難民キャンプでの暮らしぶりなどインタビューを行いました。長老の子供や孫も同席していました。私の帰り際に家の宝物を見せたいといって、家の奥に大事にしまっていた箱から大きな鉄でできた錆びついた鍵を取り出しました。長老は、〈我が家を追われる時、家の戸締りをしこの鍵を持ってきたこと、いつか故郷にもどれたらこの鍵であけて自分の生まれた育った家で再び暮らすのが今の生きる希望であること、自分で夢が叶わなくてもその夢を子供や孫に託していること〉を生き生きと語り掛けてきました。長老はどこまで本気かわかりませんが、子供や孫も既に成人となってお

り、常識的には本気でその家に帰れると信じていないと思います。イスラエル領となった地に今は入ることができず、仮にその地に足を踏み入れることができて、長い時間で積み重ねられた既成事実は簡単に覆るものではありません。それでは錆びた家の鍵は無用の長物なのでしょうか。決してそんなことはないと思います。60 年前にパレスチナの地に後から入ってきたユダヤの入植者に追い払われ家と故郷を失ったこと、場合によっては襲撃を受け、生死をかいぐり逃げてきたという事実を忘れないこと、そしていつか故郷に戻るという希望を持ち続けること、これら記憶と想いを、世代を超えて引き継ぐものがこの鍵なのでしょう。やはり家の宝物に違いありません。

イスラエルではいくつもの大きな街があり発展していますが、市街地を抜ければ乾燥地特有の赤茶けた大地が目の前に広がっています。長距離ドライブをしていると、疲れた頃にオアシスのような緑に覆われた公園が目飛び込み、目と心を癒してくれます。このような公園は国内に点在しており、一年を通じた鮮やかな緑に加え春になると可憐な花が公園一面を覆いつくし、あたかも天国にいるような気分になります。イスラエルの人の週末の楽しみは家族や友人と公園に出かけてピクニックや BBQ というのが定番です。私も事務所のスタッフやイスラエルの友人と BBQ を楽しみました。ある時イスラエル人の高齢の学者と話をした際に私は雑談で公園での BBQ を話題にしました。学者先生は、自分自身は公園で BBQ はしないと言い、私は変わったイスラエル人だと思理由を問いました。先生は重い口調で、今やほとんどのイスラエル人は知らないが、と前置きして理由を語ってくれました。「先住のパレスチナ人を追い払う時、抵抗するパレスチナ人と闘争となり、装備で劣るパレスチナ人の犠牲者が多数出た村も多かった。流血の惨事があったパレスチナ人の集落は跡形もなく（跡形をなくすように）焼き払われた。そしてより悲惨な事件があった集落跡は土が盛られ植林がされ、今は公園になっている。」という話をしてくれました。流血の闘争の場であり、多くの犠牲者の墳墓のような場所で BBQ はしたくないという先生の気持ちはよくわかります。公園には日本の史跡のように由緒を示した掲示は当然なく、歴史を知らないイスラエルの人の憩いの場になっているのもやむを得ません。パレスチナの難民キャンプで面談した長老が例え孫やひ孫の時代になっても帰ることを希望していた故郷の家や村も焼き払われ、週末には幸せそうなイスラエルの家族で賑わう公園の一部となっているかも知れません。私もその上で楽しい一時を過ごしていたかもしれないと思胸が締め付けられました。知らなければよかったのにと一瞬思いましたが、きちんと知ることで現実に向き合うことの大切さを実感しました。

6 月 19 日の県を跨ぐ移動が解禁され、移動の自由のありがたさを実感し、移動の自由のないパレスチナのことが思い出されこの話を書こうと思いました。とはいえ、日本にも同じような歴史があることを忘れてはいけません。6 月 23 日は 75 年前の太平洋戦争の一部である沖縄戦の終結日にあたり、「慰霊の日」の追悼式が行われました。沖縄戦では地上戦が行われ、県民の約 4 人に 1 人が命を落としたと言われていますが、生き残った人々も収容所に強制隔離され、米軍は住民の土地を収奪し基地を建設しました。太平洋戦争終了後も朝鮮戦争等の国際情勢の緊迫を受け、住民を強制的に追い出し、家を壊し田畑をつぶしさらなる基地の建設、拡張が行われました。それが現在の米軍基地として今に至っています。蒸せるような不快な梅雨が明けると肌を焦がすような夏がきて、その酷暑の下で広島、長崎の平和式典、戦没者追悼式典が執り行われ、日本の夏が終わりを迎えます。コロナのように例え直接自分の身に不幸や不便は及ばなくても、この日本で悲惨な戦争が繰り返されていた事実の想いを馳せ、今の平穏な日常が決して当たり前でないということを考える機会になればと思います。

(終わり)